

国立民族学博物館の収蔵品 63

愛され続ける伊勢大神楽の獅子頭

本館展示場入口のイントロダクション展示では、伊勢大神楽の獅子頭がインドネシアのバロン等と共に来場者を出迎えている（写真1）。伊勢大神楽とは、西日本各地で獅子舞と曲芸を奉納しながら旅を続ける人々とその芸能のことである。伊勢大神楽講社に所属する五つの組はそれぞれ古くから各地の人々との約束を守り、毎年決まった時期に訪問し、家々の玄関先で獅子舞による厄祓いをする。この日本で現在も旅の芸能を仕事にしている大変貴重な存在である。

各組はたいいてい獅子頭をいくつか持っており、一年間用いた獅子頭は交替で塗りに出している。年末に塗りが仕上がってくると、神楽師たちは来年のために「きぬつけ」を行う。獅子頭は頭だけでは完全体ではないのだ。青と紺と白色の縞模様や家紋が染め抜かれた幕、幣（ぬさ・獅子のたてがみとなる和紙）、頭とあごを結ぶ麻綱、口の奥で演者の顔を隠す物見の布、耳を支える布団などを一緒に新調し、獅子頭にとりつける。また、一年間別々に旅を続けた五つの組は、十二月二十四日に本拠地の三重県桑名市に集結し、大規模な「総舞」と呼ばれる奉納公演を行うことで知られている。さらに翌二十五日には神職を招いて、翌年用いる獅子頭に魂を込める「御魂入れ」も行っている（写真2）。そしてモノとしてのシシガシラが「伊勢のお獅子さん」へと変身を遂げ、元旦から人々の厄を祓って廻るのである（写真3）。今でも「獅子に頭や体を噛んでもらうと病気が治る、賢くなる」といって、人々は獅子に噛んでもらいたがる。かくいう筆者も調査中にちよく噛んでもらっているし、本館研究員の採用試験の前には獅子頭展示の前で気合を入れてから面接に向かった。ご利益あってか、現在も研究を続けら

れている（写真4）。ちなみに本館の獅子頭は、二〇〇八年に大阪府（北摂）に住む女性から寄贈されたものである。亡くなった夫君が生前、熱狂的な大神楽ファンで、桑名の知人の仲介で職人に依頼しこの獅子頭をあつらえたのだという。寄贈時には頭のみだったので、伊勢大神楽講社長の山本源太夫氏の協力により「きぬつけ」を行い展示に至った。それにしても、獅子頭まで作ってしまうくらいだから筋金入りの大神楽ファンである。ご健在だったら是非お会いしてみたい。実は伊勢大神楽が廻る地域では、大神楽から獅子頭を譲り受けて地元の獅子舞に用いたり、以前廻っていた組の獅子頭が神社に奉納されていたりする場合が見られる。大神楽の獅子頭を模した造形物が地域の祭りに登場することもある。本館への寄贈にまつわるエピソードもまた、大神楽が現代に至るまで人々に愛されてきたことを示してくれる一例だといえよう。みんなくを訪れたら、是非そんなことを思い出しながら展示場の入り口で獅子頭をじっくり見て頂きたい。



写真1 本館の獅子頭



写真2 御霊入れ神事
(三重県桑名市太夫)、2018年12月



写真3 家々を清める大神楽
(滋賀県大津市)、2019年1月



写真4 獅子に噛んでもらう筆者
2018年12月

(神野 知恵)